様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１４４３４

研究課題名（和文）未成年大学生を対象としたアルコール問題啓発プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of a program to impart knowledge of alcohol problems to underage university students.

研究代表者
三好　真人（Miyoshi, Masato）

常葉大学・教育学部・講師

研究者番号：５０７５８５０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　大学生の抱くアルコール依存症へのイメージ調査を実施し，断酒会主導者と作成した啓発プログラムを4回合計415名に実施した。プログラムの評価は事前事後テストデザインにて実施した。参加者は質問紙にプログラム実施2週間前と受講直後に回答した。分析対象となった者は，A大学105名（男性45名，女性59名，不明1名；平均18.58歳），B大学①60名（男性21名，女性39名；平均19.22歳），B大学②78名（男性28名，女性48名，不明2名；平均18.76歳）となった。プログラムの実施前後で「アルコール依存症の正誤問題正答数」および「アルコール依存症の知識量」の上昇における統計的有意差が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究で作成したプログラムはアルコール依存症当事者の自助グループである断酒会と協働実施する体制になっている。「アルコール健康障害対策推進基本計画」でも必要とされている教育現場と自助グループとの連携を活性化させるプログラムとなった。受講生にとっては，アルコール依存症当事者である断酒会会員を伝え手とすることでリアルな体験談をもとにした問題の深刻さが伝わるとともに，アルコール関連問題への知識啓発を行うことが出来た。
　本研究で作成したプログラムは今後も持続的に実施可能な体制になっており，内容を発展させながら社会的還元を継続していく。

研究成果の概要（英文）：　After conducting a survey on the image of alcoholism held by University students, an awareness program developed with DANSHUKAI leaders was implemented 4 times to a total of 415 students. The program was evaluated using a pre-post test design. Participants completed questionnaires two weeks before and immediately after attending the program. The participants analyzed were 105 from University A (45 males, 59 females, 1 unknown; mean age 18.58 years, SD = 0.90), 60 from University B (1) (21 males, 39 females; mean age 19.22 years, SD = 0.41), 78 from University B (2) (28 males, 48 females, 2 unknown; mean age 18.76 years, SD = 0.69). Statistically significant differences in increases in "number of correct answers to alcoholism questions" and "amount of knowledge about alcoholism" were found before and after the program.

研究分野：コミュニティ心理学

キーワード：アルコール依存症　大学生　断酒会　自助グループ　プログラム評価　アルコール関連問題

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

様々な物質使用障害への支援と対応のあり方が問題となっている。物質使用障害のなかでもアルコール使用障害は，依存対象の入手しやすさ，日本社会のなかでの酒類に対する寛容さ，法的整備の行き届かなさ等から大きな問題となり罹患者の増加が指摘されてきた（樋口，2008）。そこで内閣府は，2014 年 6 月に「アルコール健康障害対策基本法」を施行し，2016 年 5 月には「アルコール健康障害対策推進基本計画」（以下，基本計画）を策定した。基本計画によって問題を抑止するために様々な規制が敷かれることとなった。

アルコール使用障害における対策として肝要を成すのは，依存症者への「治療」の促進と，依存症者を生み出さない「予防」のアプローチである。これらは「基本計画」にも明示されている。特に，リスクの高い 20 歳未満の未成年者飲酒を 0 にすることは健康日本 21 でも謳われているが，高校生を対象とした調査では，男子 27%・女子 21%が飲酒習慣を持っており（厚生労働省，2008），18～20 歳まででは 50%に近い者に飲酒経験があることが明らかになっている。また，酒席に瀕する機会の多い大学生では学内活動でのアルコールによる事件がメディアに取り上げられることも多い。しかし，大学生の場合は個々人の自己責任と言われ，教育が行き届いていない現状がある。大学側の対応を調査した結果でも，講義とガイダンスでアルコール問題の怖さを周知している大学は全国 321 校中 28 校でしかなかった（NPO 法人 ASK，2014）。その理由として，学生の自主性を重んじる気風，教職員の理解・認識不足，深刻さが伝わらない等が挙げられている。

そこで，大学生を対象としたアルコール関連問題の心理教育プログラムを実施する研究を計画した。そのプログラムの作成をアルコール依存症の自助グループである「公益社団法人・全日本断酒連盟」（以下，断酒会）の主導者と協働することとした。基本計画策定の道程には行政・医療関係の専門家だけが関わったわけではない。アルコール依存症は，回復はあっても治癒はないと言われるように重症化すると生涯アルコールを断たないことには容易に再発する慢性の問題である。そこで，古くから専門職による対応だけでなく，自助グループのような地域で依存症者が支えあう場が治療と並行して重要視にされてきた。そして，今回の基本計画の策定にも自助グループ主導者たちが行政との連携を行ってきており，計画推進にも自助グループの協力を得ることや自助グループ活動を支援することが明示されている。要支援者に対して包括的な切れ目ない支援が求められるアルコール依存症という問題に対して，その予防・啓発活動にも研究者と当事者が協働的に取り組むことで相乗効果を生み出せると考えた。

２．研究の目的

本研究では「基本計画」がターゲットとする未成年および大学生の飲酒問題へ効果的なプログラムを作成することを目的とする。これまでの大学生を対象としたアルコール問題への講義・ガイダンスには，「担い手の認識および力量不足」，「深刻さが伝わらない」ことが大きな障壁となってきた。この問題を以下の観点からクリアすることが本研究の目的である。

① 「深刻さが伝わらない」問題

アルコールは怖いものというメッセージのみでは深刻さは伝わらない。学生がアルコール問題に対してどのような認識の誤りを持っているのかを調査し，それらを是正するプログラムが求められる。プログラムにアルコール依存症への差別・偏見・誤解を精査した内容を組み込むことで問題の深刻さがより伝わるものとする。

② 「プログラムの担い手」問題

本研究では「アルコール健康障害対策推進基本計画」の１ピースとして位置づけられる「断酒会」主導者を「担い手」に組み込んだプログラムを作成する。当事者である断酒会会員を伝え手とすることで，リアルな体験談を組み込み，問題の深刻さが伝わることが期待できる。

③ 断酒会との協働

教育機関と断酒会の連携によるアルコール問題の啓発活動実施モデルを作ることで，問題を予防するという協働的アプローチを実践する。

３．研究の方法

【研究 1】大学生を対象としたアルコール依存症に関するイメージ・知識調査

①質問紙調査

Q1　「アルコール依存症へのイメージ自由連想」

大学生が抱く「アルコール依存症」のイメージへマインドマップを用いたイメージ連想法を用いて接近することを試みる。マインドマップとは，用紙の中央に設定した刺激語から連想されるものを，中央から伸びる枝状の線に自由に書き連ねていくことで連想を促し，かつ記録していくツールである（Buzan.T&Buzan.H，1993/2005）。この方法により，対象者へ自由度の高い回答を求めることで多面的な理解が得られるだろう。また，対象者の連想の拡がりを促し様々なイメージを引き出すことが期待される。

Q2　「アルコール依存症の正誤問題」
アルコール依存症に関する知識を問う質問では，平田・牛ノ濱・末吉（2007）が「アルコール依存症に対する看護学生のもつイメージの構造」を調査した際に作成したものをもとに正誤問題を作成した。平田・牛ノ濱・末吉（2007）では問題は 10 項目であったが，アルコール関連問題に詳しい大学教員 2 名で項目内容を再検討した。そのなかで正誤の判定が不明なものを削除し，表現を修正した方が良いと判断したものを検討した結果，本研究では 8 項目を作成した。
Q3　「アルコール依存症へのイメージ選択式」
さらに，内閣府が平成 28 年に実施した「アルコール依存症に対する意識に関する世論調査」の項目を参考に，アルコール依存症に対するイメージ（内閣府，2016）の項目のなかから複数回答可にて選択する質問を作成した。
Q4　「アルコール依存症の知識」
同じく内閣府（2016）「アルコール依存症についての説明」を参考に作成した。
②調査対象者
異なる地方にある a 大学・b 大学に通う心理学を専攻する大学生 193 名が質問紙に回答した（男性 86 名，女性 106 名，不明 1 名；平均年齢 19.07 歳，標準偏差 0.75）。学年の内訳は，1 年生 132 名，2 年生 68 名であった。なお，a・b 大学ともに臨床心理士養成指定大学院および公認心理師カリキュラムを有する。両大学のカリキュラム上，専門的な知識を習得する以前の 1・2 年生を対象に調査を行った。調査は 2019 年 11 月から 12 月に行われた。

【研究 2】大学生への知識・イメージ調査を題材とした断酒会主導者らとのプログラム検討
【研究 1】の結果を断酒会主導者たちに開示し，主導者と研究者のディスカッションを通して大学生に伝えるべき内容を盛り込んだプログラムを作成した。実施には，東京断酒新生会の「会長会」に依頼を打診した。会長会は，東京都内の各地域の断酒会会長や主導者が集う場である。会長会にてプログラム検討を実施した。

【研究 3】作成したプログラムの実施と評価
都内私立大学にて，2022 年 6 月（受講者 217 名）・12 月（受講者 35 名）の 2 度実施した。さらに，東海地方の私立大学にて 2022 年 6 月（受講者 74 名）・2022 年 11 月（受講者 93 名）の 2 度実施した。プログラムの構成は 4 回とも同一の内容であり，複数回受講する者はいないように設定した。合計 415 名を対象に実施した。
本プログラムの評価は事前事後テストデザインにて実施した。参加者は【研究 1】にて作成した質問紙に，プログラムの実施 2 週間前（プログラム前）とプログラム受講直後（プログラム後）に回答した。本研究でアウトカムとしたのは，質問紙の Q2「アルコール依存症の正誤問題」と Q4「アルコール依存症の知識」である。これら設問は，アルコール依存症に関する知識量を測定したものであり，プログラム実施後に得点が上昇すればプログラムの学習効果を認めることができると思われる。
合計 415 名の参加者のなかで，都内私立大学にて 2022 年 6 月（これを A 大学と表記する），東海地方の私立大学での 2022 年 6 月（これを B 大学①と表記する）・2022 年 11 月（これを B 大学②と表記する）の受講者のうち，プログラム実施の 2～4 週間前に事前テストに回答し，受講後に同一のテストへ回答した参加者を分析対象者とした。分析対象者の内訳は，A 大学 105 名（男性 45 名，女性 59 名，不明 1 名；平均年齢 18.58 歳，標準偏差 0.90），B 大学①60 名（男性 21 名，女性 39 名；平均年齢 19.22 歳，標準偏差 0.41），B 大学②78 名（男性 28 名，女性 48 名，不明 2 名；平均年齢 18.76 歳，標準偏差 0.69）となった。

【研究 4】プログラム受講者への事後調査
プログラムの内容を受講者がどのように受け取ったのか，およびプログラムにて伝達された学びを実生活に活かすことが出来ているのかを調査するために事後インタビューを行った。A 大学の事後 1 か月後（2022 年 7 月）に 1 名（インタビュー時間 18 分），B 大学の事後 2 か月後（2022 年 8 月）に 2 名（インタビュー時間 16 分・17 分），B 大学②の事後 1 か月後（2022 年 11 月）に 3 名（インタビュー時間 28 分・20 分・19 分）の計 6 名を対象にインタビューを行った。

一連の研究の実施に当たっては，研究者の前所属大学と現所属大学の研究倫理委員会にて審査と承認を受けた。

４．研究成果

【研究 1】大学生を対象としたアルコール依存症に関する知識・イメージ調査
Q1「アルコール依存症へのイメージ自由連想」によって得られた回答を分析した。KJ 法による分析過程で，全 906 のカードが作成された（平均記述単語数 4.69，標準偏差 2.75）。これらを分類した結果，30 個のコード（その他を含む）と 6 つのカテゴリーがつくられた（Table1）。

Table1．大学生がイメージ連想法によって抱くアルコール依存症のイメージカテゴリー一覧

カテゴリー（出現数合計）	コード	具体例	出現数
アルコール依存症の原因イメージ（77）	状態不安定	不安定，イライラ	35
	ストレス	ストレスが多い，ストレス解消	22
	飲酒強要	無理に飲まされて，強制	10
	大学でのイベント	新歓，サークル	9
アルコール依存症が及ぼす影響イメージ（317）	迷惑	周りに迷惑，うるさい	79
	暴力	暴力，暴言	64
	家庭内問題	ＤＶ，虐待	46
	人格の崩壊	人生だめに，人としておわり	33
	健康に害	健康によくない，体をおかしくする	26
	仕事の喪失	無職，仕事ない	23
	金銭問題	借金，浪費	19
	生活困難	生活できない，生活に支障	16
	記憶の問題	記憶をなくす，気を失う	5
アルコール依存症の「病気」イメージ（182）	病気であること	病気，病院	85
	精神疾患	幻聴，禁断症状	41
	身体疾患	肝硬変，糖尿病	21
	他の依存症状との類似	ギャンブル，麻薬	21
アルコール依存症者の様相イメージ（196）	常に飲酒	とめられない，ずっと飲んでいる	132
	性別・年齢層	おじさん，男性	28
	不潔	不清潔，体臭	24
アルコール依存症の恐ろしさイメージ（91）	死について	死ぬ，死亡	42
	難治性	なおらない，治療困難	28
	罹患者を心配	大変そう，心配	14
	無自覚	自覚なし，向き合うのに時間がかかる	4
	回避願望	なりたくない，関わりたくない	3
アルコール依存症への対応のイメージ（35）	回復の方法	断酒会，認知行動療法	19
	法的対応	逮捕，警察のやっかい	16
その他など	酒類の名称（31）	日本酒，ビール，ハイボールなど	31
	有名人など固有名詞（5）	（固有名詞を含むため非表示）	5
	その他（5）	「わからない」など	5

【研究 2】大学生への知識・イメージ調査を題材とした断酒会主導者らとのプログラム検討

【研究 1】にて得た結果を「断酒会」主導者に開示し，大学生へ伝えたいことを聞き取る検討会を 2020 年 3 月に実施した。検討会には，断酒会主導者 17 名（男性 16 名，女性 1 名）の参加を得て，およそ 2 時間のディスカッションを実施した。ディスカッションの内容をまとめ，断酒会主導者の視点から見た大学生へ伝えたい内容を分析した。プログラムはイメージ調査による誤解や偏見をもとに，アルコール問題に関する基礎知識と当事者の体験談が伝達される内容になった。

プログラムの実施者としてアルコール依存症当事者である東京断酒新生会会員の協力を得た。オンラインビデオ会議システムを用いた打ち合わせを実施しアルコール問題への理解を深めるプログラムを作成した。また，プログラムを実施する会員は，アルコールや依存性薬物をはじめとするさまざまな依存関連問題に取り組む NPO である「ASK」の ASK 依存症予防教育アドバイザー養成講座を修了した者であった。プログラムのなかには ASK の作成した「依存症ってなに？予防のためにぜひ知ってほしいこと」の内容を説明する時間も設けられた。

プログラムのタイムテーブルは以下の通りである。

①資料配布，講師紹介と講演主旨の説明（10 分）
②当事者の体験談（↓体験談に組み込んだ情報）（40 分）
- □ 依存症への「入口」のエピソード。どこがポイントだったのか。
- □ アルコールの力を利用していたエピソード。
- □ 生活が整っているように見えても病気に気づかない。気づきにくい。
- □ 「否認」していた頃のエピソード
- □ はじめてアルコール依存症の「診断」を受けた時のエピソード
- □ 「進行性の病」である。知らぬ間に悪化していることがある。
- □ うつ，拒食症，薬物依存などとの「合併症」のエピソード。
- □ 他の物質依存対象（違法薬物など）より入手が容易。金額安く手軽さの危険性。
- □ 精神的な問題に加え，身体疾患も発症することが問題になる。

□ 量の問題ではない，少量でも依存症になる。
□ 意志の問題ではない，まじめなサラリーマン，だれでもなることがある。
□ 世代間連鎖の問題。
□ 回復の仕方。
③講師とのディスカッション（30 分）
④「依存症ってなに？－予防のために知っておいてほしいこと」（ASK 認定依存症予防教育アドバイザー）（25 分）
⑤閉会，アンケート記入（5 分）

【研究 3】作成したプログラムの実施と評価

分析：Q2「アルコール依存症の正誤問題」，Q4「アルコール依存症の知識」

プログラムの実施前と実施後の Q2「アルコール依存症の正誤問題」における「正答数」および Q4「アルコール依存症の知識」における「選択数（複数回答可なので，多く選んだほうが知識が多いと想定できる）」の *t* 検定の結果を実施日ごとに示した（Table2・3・4）。プログラムの実施前後で，その差に統計的有意差が認められた。

各項目別では，正誤問題において誤答が多いのは，7.アルコール依存症から回復するためには，助けをもとめお互いに支えあうことが大事である（正）および 8．AA，断酒会ともアルコール依存症のセルフヘルプ・グループである（正）であった。

選択式の知識問題において，プログラム前には選択されなかったが，プログラム後の選択率があがったものは，「アルコール依存症はゆっくり進行していくため，飲酒をしていても，依存が作られている途中では自分では気付かない」，「断酒を続けることにより，依存症から回復する」「お酒に強い人ほどなりやすい」，「女性の方が短期間で発症する傾向がある」の 4 項目であった。

Table 2
A大学での正誤問題正答数と知識項目選択数の平均値(標準偏差)と*t*検定の結果(*n*=105)

	プログラム前 (*n*=105)	プログラム後 (*n*=105)	*t*値 (*df*=104)
正誤問題正答数	7.64 (.695)	7.80 (1.08)	2.02*
知識項目選択数	3.03 (.526)	4.06 (1.36)	8.37**

*p <.05, **p <.01

Table 3
B大学①での正誤問題正答数と知識項目選択数の平均値(標準偏差)と*t*検定の結果(*n*=60)

	プログラム前 (*n*=60)	プログラム後 (*n*=60)	*t*値 (*df*=59)
正誤問題正答数	7.57 (0.53)	7.75 (0.47)	2.38*
知識項目選択数	2.62 (0.56)	3.95 (1.38)	6.98**

*p <.05, **p <.01

Table 4
B大学②での正誤問題正答数と知識項目選択数の平均値(標準偏差)と*t*検定の結果(*n*=78)

	プログラム前 (*n*=78)	プログラム後 (*n*=78)	*t*値 (*df*=77)
正誤問題正答数	7.60 (0.54)	7.86 (0.39)	3.96**
知識項目選択数	2.99 (1.08)	4.19 (1.54)	7.37**

*p <.05, **p <.01

【研究 4】プログラム受講者への事後調査

インタビューでは，講師を務めた東京断酒新生会の会員への意見として〈依存症者イメージのギャップ〉という意見があった。依存症者に対して，【研究 1】のような暴力や不潔というイメージがあったが，講師からそのような様子は見られなかったことに驚きを抱いている。それに付随して〈誰にでもなる病〉〈依存症当事者だけの責任ではない〉という理解をもっていた。講師がイメージ像と離れていたことで，より身近な問題として感じたようである。また，〈断酒会への理解の変化〉もあげられた。断酒会と聞くと，参加者が実生活を共にしながら断酒に取り組むというイメージがあったようである。しかし，断酒会はアルコール依存症から脱却するための一資源であった。講師の回復エピソードでは断酒会活動だけではなく，家族との関係や入院した精神科病院でのエピソードなど多様な回復資源の存在が組み込まれていたため，そのように感じた。また，講師は断酒会のさまざまな活動に全てコミットしている者ではなく，断酒会とのほど良い付き合い方も体験談に組み込まれていたためそのように感じたと思われる。

一方で，分かりづらかった点としては，アルコール飲料は覚せい剤のような違法薬物ではないため〈適度な付き合い方〉の分かりにくさがあげられた。プログラムにてアルコールという薬物の危険性を聞いたが，全く飲まないという選択に至るわけではないので〈適度な付き合い方〉に対して思いを巡らせると，その答えはプログラムのなかにはなかったとのことである。

本研究で作成したプログラムは今後も持続的に実施可能な体制になっており，内容を発展させながら次年度以降も継続される予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 三好真人	４．巻 14
２．論文標題 つながりの実感を得る活動・実践とその難しさ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 質的心理学フォーラム	６．最初と最後の頁 88-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/shitsuforum.14.0_88	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三好真人，堀川聡司，高岸百合子	４．巻 39（5）
２．論文標題 心理学を専攻する大学生が抱く「アルコール依存症」のイメージ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 心理臨床学研究	６．最初と最後の頁 454-460
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 三好真人
２．発表標題 アルコール依存症当事者と協働したアルコール関連問題心理教育プログラムの実施と評価
３．学会等名 第25回　日本コミュニティ心理学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 三好真人
２．発表標題 自主企画シンポジウム『公認心理師と当事者コミュニティの協働関係』
３．学会等名 第2回日本公認心理師学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 三好真人
２．発表標題 自助グループでないものとは何か？
３．学会等名 第38回日本森田療法学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

関東Block断酒School2022研修②講師「グループ・アプローチとしての自助グループ」（全日本断酒連盟 関東ブロック協議会）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関